

2017 年度前期 学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント

—文芸学部—

文芸学部長 村瀬 鋼

今年度前期の授業評価アンケートは、本学部については 347 科目を実施対象科目として 327 科目から回答が得られ、実施率は昨年度前期（313 科目中 293 科目から回答）の 93.6%を若干上回って 94.2%となった。特に、実施必須科目については 202 科目中 201 科目の実施であった。これは、科目担当教員の間にはアンケート実施についての意識が十分に浸透していることを示すものと言える。

さて、集計結果についてであるが、全体としてはおおむね満足のできる数値を示しており、文芸学部の授業が大略健全に運営されていることが窺われる。本学部の平均値は、1 から 14 までの全設問において、1 のみを例外として、大学全体の平均値を上回っており、また 3 から 14 までの設問に関しては、四学部および全学共通教育のなかで最高値を示している。大学全体の平均値からして、既に、設問 9 と 14 を除いて全て 4 以上の評価という、十分な高水準を維持しているが、それを上回る数値を示している本学部は、学生を十分に満足させる授業の展開という点に関して決して恥ずかしくない状態にあると判断される。

また、一昨年前期および昨年度前期の結果と比較してみると、どれも高水準を維持しつつ概ね上昇傾向にあり、なかでも目に付く上昇項目の経年推移を挙げれば、(2) 4.15→4.22→4.24、(6) 4.00→4.12→4.15、(9) 4.03→4.11→4.12、(10) 4.34→4.43→4.46、(11) 4.17→4.31→4.32、(12) 4.29→4.42→4.44、(14) 3.37→3.54→3.65、となっている。当該の設問内容から見て、これらの数値の上昇は、さほど大幅なものとは言えないながらも、近年の本学部の教育改革の企てにおけるアクティヴ・ラーニングの推進により学生の学習態度がより積極的になり、教員もそれに応じそれを促す授業運営を行っている、という事実を、確実に示しているものと思われる。

本学部に限らず、大学全体に関してもこの同じ上昇傾向が認められるのであるが、このような結果からは、全般に本学教員の間で、授業評価アンケートを一つの参考として利用しながら、学生の状況と要求とに応じた授業改善の取り組みがそれなりにきちんとなされ、それが相応の成果を挙げている、ということが読み取られる。

以上、アンケート結果から判断するに、本学および本学部の授業運営は、対学生という観点からすれば、総体として概ね十分適切に行われていることがうかがわれる。